

コロナ禍における乳児院の対応

今西裕子

大阪乳児院 院長

2021年4月下旬、第4波が大阪を襲い、感染拡大の中、初めて乳児院職員に感染を認めた。症状のある職員から報告があり、PCR検査をしたところ陽性が判明。同室職員、濃厚接触者の子どもは陰性であったが、翌日に隣室の職員2名が陽性判定となり、職員は合計3名陽性者となった。このときは子どもに感染者は発生しなかったが、こぐま室、りす室の職員に3名の発症者が出たため、濃厚接触者となった子どもを部屋ごと隔離するため2階の一部を感染ゾーンとし、職員のシフトの組み直しをおこなった。このときが乳児院としてコロナに対応する初めての機会であったため職員の不安は高かったが、子どもにも職員にも新たな感染者を出さず2週間で感染は終息した。

次に2022年1月18日初めて乳児院にクラスターに当たる院内感染が発生した。1名の職員から2日後に5名の職員、25日にさらに4名の計10名が罹患した。子どもは18日に1名、6日目に2名の合計3名となった。その際に、隔離ゾーンの設定、勤務シフトの組換えなどの作業は大変ではあったが前回の経験を踏まえることで、比較的スムーズに対応することができた。このときの終息は繰り返す院内感染を抑え込むのに時間がかかり、2月6日となった。また感染した子どもも合計7名になったが、いずれも無症状で特段の医療処置

を必要としなかったことは幸いであった。ここから学んだことは子どもへの感染は大人が持ち込むという当たり前の認識である。マスクをしていない乳児や幼児には保育者の感染対策が重要であると再認識した。

次のクラスターは年度末の3月27日に実習に来ていた保育の学生の持ち込みであった。

発熱があったにも関わらず、子どもとの接触、担当保育士との接触があった。当然ながら4月1日に保育士1名、子ども3名の感染が認められた。このときの院内感染を発端者からの感染のみ抑え込み、それ以上の二次感染をおこさなかったのは1月のクラスターで学んだ感染対策と病院のICTのアドバイスであった。また細菌検査室には繰り返しのPCRをおこなっていただき大変ありがたかった。

私達はマスクのできない子ども、外部から面会に来る保護者に対して、その時の感染状況に合わせた防御策を行ってきた。感染対策をしながら、外出を控えなければならぬ子ども達に院内でできる「いちご狩り」や「お祭りの屋台」など、趣向を凝らして豊かな体験ができるように工夫をしてきた。COVID-19が子どもたちの近くに押し寄せても、職員が一丸となって楽しさや笑顔を提供し続けた2年半であった。



隔離



隔離方法



いちご狩り



お祭り

受付け：令和4年6月27日